

「なぜ、TT がうまくいかないのか」(原因編と治療編) を読んで

(目的) 単元全体の構想(育った姿からの逆算)をALT と共に行うこと、「正しい指導」を行うことで、3ヶ月で教師も生徒も変わったという事実から、深層を読み解く。

◆「授業映像①」を見て感じたこと

- 指示がゆっくりで明瞭である
- 全員が活動に参加する雰囲気がある
- 英語の発話に対して、笑ったり感想を述べたりリアクションがある
- 先生は教室中を回り、評価をしたり、アドバイスをしたり、活動を促したりしている
- よくできているグループに発表させるが、嫌がる生徒はいない
- よくできていたグループの発表により、こちらが求めているレベルが共有できる
- さらに評価とアドバイスをその場で与えている
- 今日のゴールを明確に示している
- ALT との活動の説明が、生徒にとってとても興味深く、入りやすい内容である
- 生徒同士の意見交換の時間を利用して、アイデアを深めている
- 理由を聞いたときに”because”がすぐに出てきている(日々のトレーニング)
- ALT とのデモンストレーションがとても楽しそうであると同時に、オリジナルスキットの作成に応用しやすい内容である。
- マンダラ・チャートをオリジナルスキットに使う「表現を広げる」ために用いる
*マンダラ・チャートの使い方の一例として、とてもためになった。私が思っていた使い方と違っていた。(生徒ができなかったのは自己流だったためと理解)
- 生徒のノートにはオリジナルのマッピングが書かれており、教師が準備した枠を使用しておらず、完全に生徒が自由に発想を広げている。
*生徒のノートを活用して、表現の幅を広げたり、アイデアを深めたりする練習が不可欠。(情報の整理、考えの形成は「技能」。技能を獲得するのは生徒。教師は「技術」は教えられても「技能」は教えられない)
- アイディアを深めるマッピングでは日本語(母語)が使われている。ただ、得意な生徒が英語を選択する場合はそれを認めている(*英語の授業だから「英語でマッピングをするのが当たり前」と思い込んでいた。実際、英語で書くとそれをそのまま読もうとしていた。また、苦手な生徒は何も書けていなかった。ジム・カミンズの「氷山説」の通り)
- 友人との意見交換やアイデアの交換が許可されている。(生徒はヒントにすることはあっても、安易に真似をさせない指導ができています)
- アイディアを広げる場面は、沈黙ではなく、自由度を高めている。(言いやすさ)
- 教師が、モデル(具体)となるマッピングを示している。(イメージの共有)
- マッピングを「オリジナル・ストーリー」(思考法・まとめ方)と認識させている。
- マッピングは1つのトピックにしぼり、それを深掘りしている。

- マッピングは書いたら終わりにせず、教師や仲間からのアドバイスを受けて何度も修正している。(こだわりが生まれ、内容がみるみる昇華されていった)
- 頭に「ロードマップ」ができたなら、マッピングシートを見ずに言うことを習慣に。
- 授業の中で。生徒のポテンシャルを信じて「浮き輪」を外す瞬間を作る。(家庭学習にしない)
- 生徒同士でアドバイスを言い、互いにより良い状況になること、そして良いクラスづくりを目指している。

◆「授業映像②」を見て感じたこと

- 基本本文の定着を図る活動が印象に残った。教科書を先に進めるだけでは、英語が自分の言葉として使えるようにはならない。今まで教科書で習った基本本文は、言語材料が入っており、それを「英語→日本語」「日本語→英語」で高速変換できるということは「学力の定着」に欠かせない。帯学習で“Basic Pair Work”と名付けて行いたい。
- まず初めに今日のゴールを示す。(ゴールは「しよう」ではなく「できる」)
- マッピングを見ずにリハーサルを行う場面を用意している。
- 即興で質問をする練習を入れている。
- 発表者の発表の流れは、事前に示してある。
- 自分の気持ちを伝える表現の練習も日ごろから行われている。
I think it is ～と簡潔に伝える練習を、英語検定の作文のお題を活用して行いたい。
- プレゼンやALTの話を書く時は、ノート(メモ)をとることが大切。それによってキーワードに気づけるし、そこから質問ができるようになる。
- プレゼン後には質問をするところまでがセットになっている。
- ビデオに記録を残すことを習慣にしている。(自己評価のため、内容改善のため)
- プレゼンの中にも質問があり、ほかの生徒がそれに答える瞬間がある。
- 本当に紹介しなければならないというリアルな状況を作る。
- テーマ設定により、必然性とリアリズムを与えることができる。
- マッピングに対して質問をしていくことで対話的にアイデアを深めていく。
- ALTに質問して、加えるべき情報を精査していく作業。
*この活動は素晴らしいと思った。決め決めではなく、臨機応変に対応できる力を身につけることが大事であり、ALTと相談し、聞いてみたい情報や、ニーズに応じて、プレゼン内容を構成していくような授業にしたい。研究授業でも取り入れたい。
- 求められている状況に応じて、声掛けや、人称を変化させている。(練習してからではなく、使いながらミスを修正している)

- 友達が困ったときには、周りが自然にサポートしている。
- 自己評価の場面の大切さ。(教師が、落とし所として「自分の体験を交え、順序だてて説明できたか」という視点を与えている)
- 今後の改善点をまとめる。(モヤモヤ感を大切に、今後の学習をどうしていきたいかという「メタ認知能力」を高めることを大切にしている)

◆「授業映像③」を見て感じたこと

- 帯活動で、自分のことを話す練習にかなり習熟していることがわかった。
- 5・6もの情報を何も見ずに話すことができています。
- Teacher's talk やペアワークで自然に相づちを打っている。
- 「なぜ？」と聞き返すことが習慣になっている。
- スピーチの流れをマッピングでまとめているので、頭にイメージできています。
- ALT のいったことを理解して笑ったり、英語での聞き返しにすぐに答えたりしている。
- インタビューを通して、深めている
このやり取りも、今後 ALT と共同して深めていくアイデアとして使っていきたい。また、生徒同士でも、質問をしあって深める瞬間を作ることができたらすごいと思う
- 「your story」がキーワードになるような気がした
自分だけの物語や、思い出を加えることができたなら、聞き手の興味を引くことができる
- スピーチを聞きながら要点をまとめる作業がある (聞きながらマッピングを再現する)
なるほど、と思いました。ノートを開けさせ、友達のスピーチをマッピングでまとめていく作業なら、すぐに取り入れることができます
- 質問事項を赤ペンで残す。質問されて加えた項目を赤で加える
改善された部分分かり、スピーチの質が向上していることを感じるができる
- アイディアを深める場面では日本語の使用が許可されている
- 授業担当の先生はほとんど日本語を使用していない
- 片言の英語でも、あきらめて日本語を使用しようとせず話そうとする姿がある
生徒が、この授業を受ければ英語を話すことができるようになるかと信じている。
- 1人でスピーチの練習をする時間を1分程度与えている 用紙を見てもよい
- 基本が定着していることの重要性を強く感じる
- さらにペアとの練習をさせる
- タイマーを使用する
・話せるようになるためには、話したくなるお題を用意する必要がある
- 精査する作業 問いかけを加える 重要な内容から語る 終わりの挨拶
マッピングでは、グルーピング、ナンバリングがなぜ必要なのかが分かりました。
- 心の中で練習、その後「浮き輪」を外す。イメージを作り、何も見ずに話す練習をする
- ジェスチャーも多用することで、暗記の作業ではなくなるのがわかった
- bend とか recommend などの用語を使いこなしているのに驚いた
- 振り返りシート (自分がどのように変容したかを具体的に言語化する)

指導者の感想中の「生徒を過小評価していた」「もっと生徒の力を信じる」に共感するとともに今までの自分を反省。自分も過小評価されたら嫌な気持ちになる。

○なぜ、TT がうまくいかないのか（謎解き編）を読んで

- 話す力を伸ばすための「正しい指導」をする必要がある。
- ALT と「生徒が育った姿」のイメージを共有する。
 - ゴールを達成するために、いつ、何をするのかという単元計画を立て、共有するところまでいっていない。それが自分の課題。
- 基本文の徹底理解+即興で疑問文を作る練習はどの学年でも minimum essential.
- 何かを聞く場合は必ずマッピングでメモを取りながら、情報を整理する。
- 要点を繰り返す練習（キーワードを相手に伝えることでインタラクティブになる）
- コメントに1文付け足す練習を行う。3文で答えさせる練習を基本とする。
- 自分でマスの数を選べるマンダラ・チャートで発想を広げる。（考えを形成）
- 階層式マッピングで内容をつなげ、深める。（情報の整理）
- グルーピングとナンバリングを必ず行うこと。（マッピングだけで終わらない）
- コメントや質問に答えることで、情報を追加する。

Before After

- ALT とのゴールの共有
- 単元計画に位置付け
- 卒業までの単元を BWD で計画 ALT と共有
- ALT との綿密な打ち合わせ
- JTE⇔NS⇔生徒のインタラクション
- 正しい指導で負荷をかける 浮き輪を外す 生徒を信じる
- 何も見ずに即興で話す
- 思考ツールを活用する
 - ・ペアでお題についてマッピングしながらインタビュー（深ぼり）
 - ・グルーピング、ナンバリング、ラベリング
 - ・他のペアに報告（何も見ずに）
- Discourse Marker で文を繋げる練習
 - ・10月-2月に行ったトレーニング
 - ① 基本文の徹底暗唱（パツと言えるまで） ② 即興で疑問文を作る練習
 - ③ スピーチ中にメモを取る練習 ④ 聞き取ったキーワードを繰り返す練習
 - ⑤ コメントに1文付け足す練習
- ・「探求コーラル・マップ」への取組

マンダラ・チャート → 階層式マッピング → グループ・ナンバリング

*テーマから考えた「要素」を最終的に4つ（3つ）選び、それを深掘りしていく。プレゼンテーションの構想（順序、伝え方）を練る。

- ・ALT と分担して指導するのではなく、一緒に「餅つき」のように進める。
- ・「学習指導案」は「授業進行案」ではない。
- ・「仮説」（指導案）⇔「検証」（授業）授業後に「成果」と「課題」をALT とふりかえることが大事。それによって「授業の分担」ではなく、力をつけるためにお互いに何ができるかを理解したTT ができる。
- ・単元最後のゴール（育った生徒の姿）から逆算しながら計画をたてる。
- ・「生徒を過小評価してはいけない。生徒が教師の姿勢を感じ取ってしまうと挑戦しなくなる」（その通りだと痛感。手が上がらないのは教師が「無理」と考えていることが伝わっている）
- ・「教えること」を意識しすぎず、生徒とともに学び、試行錯誤しながら成長していく。
- ・コミュニケーションの「必然性」が何より大切。（「今日はこれを教える」授業からの脱皮）
- ・どう教えるかではなく、「したくなる」状況をどう作るか。（学習者の心理）
- ・教科書を先に進める授業にしない。（わくわくしない）
- ・「探求」とは「問題」を自分で見つけて、改善したいと模索すること。（教師も同じ）

●より良いチームティーチングの例

1. 挨拶
2. ウォームアップ（通常は世間話やペアワークのアクティビティ）
3. レッソンの目標（TT ダイアログ、pptx、モデル、または Q&A）
4. マンダラ・チャート（文法/レッスンのトピック）
5. ブレーン・ストーミング（ペアワーク/グループワーク）
6. コースを選択。単語数。道筋を概説
7. 最初はノートを使用してペア/グループ練習、その後ノートなしで。
8. ペア/グループモデルまたはレポートタイム
9. 生徒は文法事項を書く。これは JTE が日本語で説明する唯一の部分。その後、生徒は授業で学んだ文法を使用して文章を書く。
10. 生徒は「振り返り」シートに記入する。

○ なぜ、TT がうまくいかないのか（治療編 3/3）を読んで

- ・育った姿から逆算する単元計画によって、1つ1つの活動がゴールに繋がるものとして位置づけられていた。
- ・目的意識（つけたい力の認識）があれば、生徒が主体となった活動を仕組むことができる。
- ・「前時、次時」や「既習単元」との「のりしろ」（つながり）を意識した授業づくり。
- ・ALTは「道具」ではなく、生徒を育てる「co-worker」というリスペクトを持つ。
- ・自然なインタラクションで、授業にライブ感を持たせる。（「知りたい」、「伝えたい」という必要感を作る）
- ・「技 > 体 > 心」ではなく「心・技・体」のバランスをとること。（指導技術は最初には来ない）
- ・「心」は相手を敬う気持ち・人間性であること。（授業の土台）
- ・「技」は「正しい指導」である。（できないことを「生徒のせい」にしない）
- ・「体」は「自身の英語力」=4技能の力+専門性の高さ。（自己研鑽のために、書籍を読み、セミナーに参加し、積極的に研究授業を行う）
- ・「浮き輪」（ワークシート、板書、スライドなど）を外すタイミングを考える。（浮き輪を外すのが最後では、できないまま終わる可能性もあり、早め、早めにイメージ（visualize）を持ちながら「見ないで言う」ことを習慣づけたい。
- ・「自分ごと」になる課題設定が何よりも大事。（教科書通りではなく、生徒の実態、興味関心を踏まえてカスタマイズする）
- ・基本文の高速自動化。ペアで徹底的に練習する。
「生活言語」で言い換えるのは、自分ごとになりやすく非常に有効であると実感。
- ・つなぎ言葉（discourse markers）を使って情報を付け足す練習を日常化。（言語活動を通して行う。教師が使う場面を指示をするのではなく、生徒の自己決定を促す）
- ・まとまった情報を瞬時に理解できるよう「チャンキング」を指導する。（教師が教えるのではなく、生徒が話される英語や長文中のチャンクを自分で把握しながら、そのまま頭から理解する訓練をする）
- ・情報を整理し、考えを形成するのに有効な思考ツールを生徒に教える。
「自由選択のマンダラート（マンダラ・チャート）」「階層式マッピング」「探求コーラルマップ」など。
- ・マンダラ・チャートは9マス（6つでも4つでも可能）周りに連想する語を書く。
こうすることで、関連するキーワードが浮かび上がってくる。その中から「これは」というものを選び、順序を考える。次は、単語をフレーズにし、そして文にする。
- ・インタビューマッピングでは、メモを取りながら、即座に関連する質問をする。
- ・階層式マッピング（左から右に整理をしながら階層を作っていく）
テーマ → カテゴリー → 大きな情報 → 細分化された情報
- ・階層式マッピングは「正しいやり方」がある。（自己流は力がかからないことに納得）
- ・ワークシートは欲張らずにできるだけシンプルにしたい。